

平成 24 年度 文部科学省 社会教育による地域教育力強化プロジェクト

IOT 拠点

(Issue-Oriented Terminal : 課題指向型ターミナル機能)

創出プロジェクト

事業実施報告書

はじめに

本報告書は、文部科学省平成24年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究事業として、特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所が実施した取り組みを報告するものです。

各種社会教育施設では、多くの地域住民の拠点的役割を担っており多くの住民主体による生涯学習活動も行われています。また、他方では、子ども会、自治組織、NPO等の学校、学校外教育に対する支援活動は住民同士の協働を促進し、子どもの教育機会に深みを増やすだけでなく、支援者同士にも文化的で豊かなネットワークとコミュニティを実現することが期待されています。しかしながら、現実には、そのような形で地域で住民や団体などがネットワークを形成し、活動や交流を行っている事例が少ないことは非常に残念なことです。

本事業では、その点に課題意識を持ち、連携の契機を探りながら、自ら学びを得られるような「交流のプラットフォーム（カフェ）」づくりに関わるプログラムの研究開発を実施致しました。

本事業の実施にあたり、足立区教育委員会子ども家庭部青少年課、小金井市、国分寺市、小平市の教育委員会の皆様の多大なるご協力に感謝し、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

平成25年3月吉日
特定非営利活動法人
東京学芸大こども未来研究所
松田 恵示

【目次】

- 1 実施目的
- 2 実施体制
- 3 プロジェクト実施報告
 - 3-1 実施スケジュール一覧
 - 3-2 各実施地域の前提環境
 - 3-3 カフェ講座実施までの流れ
 - 3-4 会議の回数と日時と参加者
 - 3-5 協議会組織
 - 3-6 告知方法
 - 3-6-1 既存の告知方法の利用
 - 3-6-2 新規の告知方法
 - 3-7 カフェ講座の参加者数
 - 3-8 実施時間
 - 3-9 講座（講師の選定について）
 - 3-10 各回の講座内容
 - 3-11 カフェ（交流の場づくり）
 - 3-12 カフェ講座の進行方法（タイムテーブルと進行役）
 - 3-13 交流への空間的な工夫（会場レイアウト）
 - 3-14 チラシ・ポスター
 - 3-15 講座スタイルについて
- 4 成果のまとめと課題
 - 4-1 活動展開事例としての成果
 - 4-2 カフェ講座、2つの地域モデル
 - 4-3 交流カフェの効果
 - 4-4 参加の課題
 - 4-5 ターミナルという仕組み
- 5 評価
- 6 外部評価

添付資料

1 実施目的

地域の課題

各種社会教育施設では、多くの地域住民の拠点的役割を担っており多くの住民主体による生涯学習活動も行われている。また、他方では、子ども会、自治組織、NPO等の学校、学校外教育に対する支援活動は住民同士の協働を促進し、子どもの教育機会に深みを増やすだけでなく、支援者同士にも文化的で豊かなネットワークとコミュニティを実現することが期待されている。だが現実には、そのような形で地域で住民や団体などとネットワークを形成し、活動や交流を行っている事例は少ない。それを実現出来ない理由の一つとして、個々の活動は行われているが、活動自体が「クローズド」な運営モデルであるため、活動の継続が新規人材との連携や他団体との連携へとつながらないという問題があげられる。この現状を解決していくには、個々の活動を「オープン」な運営モデルにシフトしていくことが、手段の一つとして有効に働く可能性がある。そのためには、教育系の大学が中心となって運営する全国的な認証制度(社団法人教育支援人材認証協会が主体となった「こどもパートナー/こどもサポーター/こどもサポートコーディネーター」)を活用し、学びのプラットフォームを地域に構成すべく、「学ぶ」→「活用する」→「学ぶ」という、生涯学習の循環過程を確実に築いていくことが望まれる。このためには、「場」を含んだ、地域のターミナルが構築されることで、認証制度が対面的なコミュニケーションによって確実に広がり、それが「学びのプラットフォーム」を築くことに繋がっていくことが重要である。つまり、このような地域教育に対する支援を実現する為には、新たな組織論(認証人材が「組織運営」についての講座受講と実践)とそのフレームを広げるための機能(認証人材が交流するターミナル拠点と協働コーディネート機能)が必要であるといえる。本研究は、地域の認証人材をキーとして、新たな学びを得る「講座」と、学びを実践に結びつけるための「場(カフェ)」という仕組みを用いて、社会教育活動を活性化するモデルを構築することを目的とする。

2 実施体制

実施体制

本事業はテーマタイトルを、『認証人材活用のための「IOT 拠点 (Issue-Oriented Terminal : 課題解決型ターミナル機能)」創出プロジェクト』とした。平成 23 年度の取り組みでは、育成した人材が、育成途中の OJT という形で現場に入り、育成と活動実践を合わせて行うとともに人的交流を図るという点で効果を上げ、新規人材のスキルアップとマッチングのモデル構築を行った。その中で、コーディネーターが成果を上げるためにも、OJT を行うことの出来る連携先と人材のニーズの幅に対応する幅広い連携先の情報や人材が一所に集まる、地域横断的な「場」が必要であるという課題が人材活用への可能性の鍵となることが明らかとなった。併せて、社会教育活動の現場では「人」に帰結する問題が多いという印象があるが、「人」に関する問題を「場」という視点からのアプローチによって、解決出来る問題もあることが見えてきた。認証制度がもたらす社会教育における機能は、こうした「場」を「学びのプラットフォーム」としてもたらす部分が大きく、この機能をさらに高めることがこれまで地域で活動する既存の組織を「つなぐ」ことができるとともに、そのような土壌ができてこそ、コーディネーターも活躍できるのではないかということである。その具体的な対策の一つが「カフェ」と呼ばれる交流機能を実現する「場」であり、そこでは情報交換や活動サポートが有効ということも平成 23 年度の取り組みを通して明らかとなった。本事業は、その取り組みをうけて、地域に「IOT 拠点 (Issue-Oriented Terminal : 課題解決型ターミナル機能)」を総合的に構築し、認証人材をキーとして社会教育活動全般を活性化するモデルを構築しようとするものである。そのために本事業は、地域ごとに異なる環境での拠点機能を研究・モデル化を検証するため、対象地を東京都足立区、国分寺市・小平市・小金井市としている（後者は前年度の成果を継続・発展させる）。本事業は、申請者である特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所が事業主体となる。また、一般社団法人教育支援人材認証協会、足立区教育委員会子ども家庭部青少年課、国分寺市・小平市・小金井市教育委員会、対象地域にある連携可能な小学校、社会教育施設、国立大学法人東京学芸大学の協力を得て、地域ごとに協議会を設置し、地域の活動ニーズと実際の活動と研究組織との有機的な情報交流機能を創出・実施体制をつくる。

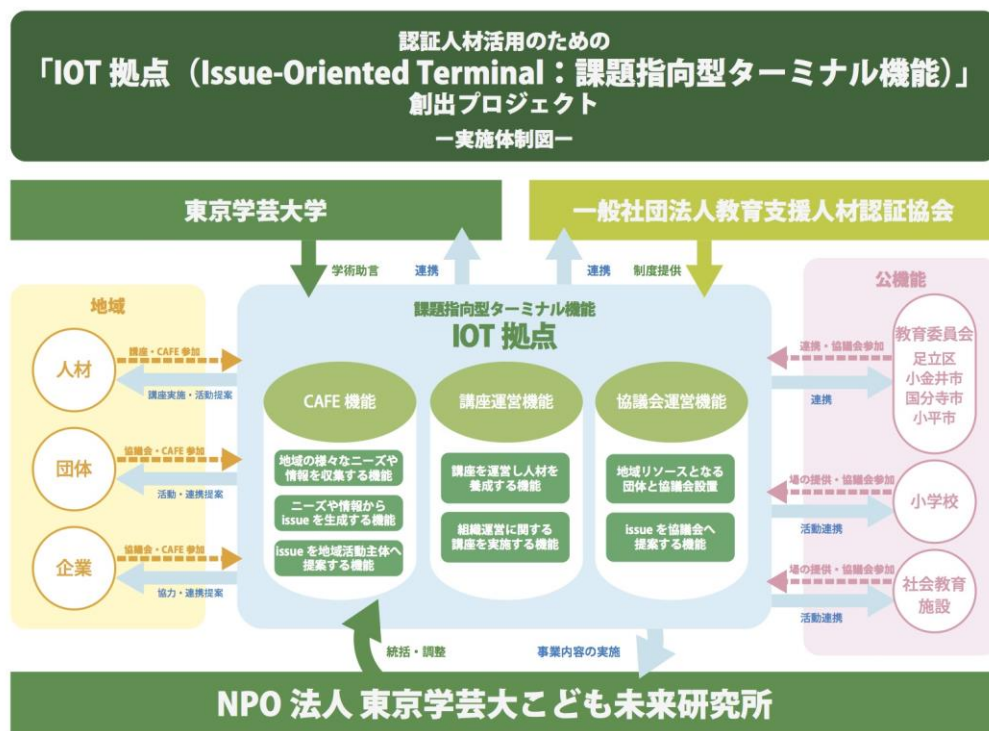


図 2-1

上記の体制は以下の実証的共同研究組織で展開された。

氏 名	所 属 ・ 役 職 等
松田 恵示	NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 理事長／東京学芸大学 教授
杉森 伸吉	東京学芸大学 准教授／教育支援人材認証協会認証評価委員会委員長
鉄矢 悦朗	東京学芸大学 准教授
正木 賢一	東京学芸大学 准教授
村上 長彦	足立区教育委員会子ども家庭部青少年課 青少年教育担当課長 社会教育主事
中島 将雄	小金井市教育委員会 教育部生涯学習課係長
本望 慎一	国分寺市教育委員会 教育部 社会教育・スポーツ振興課係長
季高 一成	小平市教育委員会 教育部生涯学習推進課 青少年教育係長
小山田 佳代	NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 理事
中島 順	NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 研究員
柏原 寛	NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 研究員

※NPO 法人東京学芸大こども未来研究所の高橋真生は、事業申請時には在籍していたが、事業開始前に籍を外したため、本研究組織には所属していない。

3 プロジェクト実施報告

本事業における、講座と交流のプログラムの名称は、参加のしやすさの観点から「フューチャー講座&カフェ（以下、カフェ講座）」と呼称した。

具体的な取り組みの概要は以下の通りである。

3-1 実施スケジュール一覧

三市	日付	時間	ゲスト	コメンテーター	タイトル	場所
Vol. 1	2012/10/26	9:30-12:00	倉持伸江		生涯学習にみる活動の理想型とは？―他者との関わりの観点から―	東京学芸大学こどもモードハウス
Vol. 2	2012/11/24	9:30-12:00	竹内千寿恵	倉持伸江	連携プロジェクトをつくろう！1	小金井市前原暫定集会施設 会議室 A
Vol. 3	2012/12/25	9:30-12:00	佐藤宮子	久田邦明	連携プロジェクトをつくろう！2	小平市福祉会館 第一集会室
Vol. 4	2013/01/19	9:30-12:00	布昭子	大熊雅士	連携プロジェクトをつくろう！3	国分寺市ひかりプラザ 203・204
Option	2013/02/15	10:00-12:00	NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 研究員			東京学芸大学こどもモードハウス
Vol. 5	2013/03/08	14:00-16:30	松田恵示・上平泰博・長津芳・天野文隆・季高 一成		三市の教育力を高めるフューチャーセッション	国分寺 L ホール

足立	日付	時間	講師	ゲスト	タイトル	場所
Vol. 1	2012/10/26	18:30-21:00	倉持伸江		生涯学習にみる活動の理想型とは？―他者との関わりの観点から―	綾瀬プルミエ第二洋室
Vol. 2	2012/11/28	18:30-21:00	井筒紫乃	川口明彦	“楽しい”からはじまる地域づくり―子どもと楽しむ連携とは―	綾瀬プルミエ第二洋室
Vol. 3	2012/12/17	18:30-21:00	鈴木光男	八木下久美子	地域で支えるものづくりと子どもの育ち	綾瀬プルミエ第二洋室
Vol. 4	2013/02/22	19:00-21:00	山田修平	山下誉裕	連携プロジェクトをつくろう！	綾瀬プルミエ第二洋室
Vol. 5	2013/03/09	13:30-16:30	松田恵示	木内菜保子	まとめ交流会	中央本町地域学習センターレクホール

3-2 各実施地域の前提環境

実践地域1：足立区

足立区では、足立区教育委員会子ども家庭部青少年課が中心となり、平成25年度4月より利用開始を予定している地域の大型社会教育施設「ギャラクシティ」のリニューアル、および利用者拡大の広報活動が行われている。

また、青少年課が当研究所と、平成22年度より共同で企画・運営した地域指導者育成講座の参加者はこれまでに約400名おり、地域の指導者と活動現場をつなぐネットワーク作りにも取り組んでいた。

地域の方々に学びの機会を提供すると、実践を交えた講座を経て、認証を得て地域で活動する支援者は多いが、その後に「支援者同士が相互に交流する」ことや「支援者が新しい活動を持つ」ということにはこれまであまり注力することができなかった。

今回のプロジェクトでの交流の場づくりは、その部分を補完するニーズに合い、青少年課の協力のもとで実施することとなった。

実践地域2：三市（小金井市、小平市、国分寺市）

三市では、各自治体同士が連携するという大きなフレームはまだ無く、その取り組みはまだ緒についたばかりである。

その取り組みのさきがけとして、平成19年度より、三市をまたがった市民に対する講座、三市連携講座が行われている。

当研究所は、その連携講座を各自治体と共同で行っている関係にあり、今回のカフェ講座は、その連携を利用する形で実施することとなった。

また、平成23年度「社会教育力による地域の教育力強化プロジェクト」での取り組みがベースとなり、プロジェクトに協力してくださったコーディネーターの方には継続して協力していただくことができた。

三市では、当研究所が主体となりながら、地域の支援者の方と進行する形で実施することとなった。

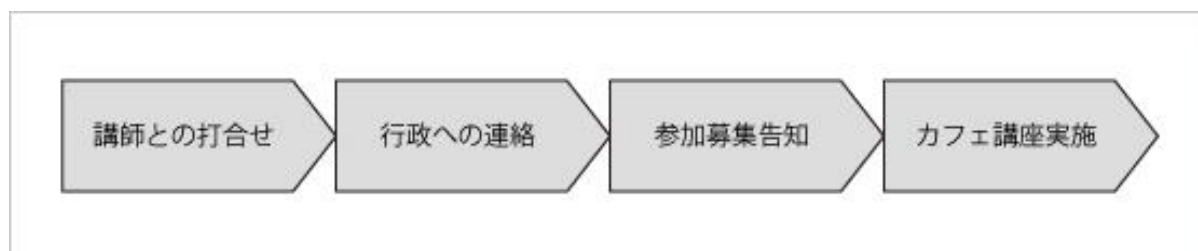
3-3 カフェ講座実施までの流れ（略図）

足立区



- ① 行政（足立区教育委員会子ども家庭部青少年課）との内容検討
 - 講座内容に関するディスカッション
 - 講師の紹介の依頼
 - 地域のゲストの依頼
 - 会場の依頼
 - タイムテーブルの調整
- ② 講師との打合せ
 - 事業の概要説明
 - 講座内容に関するディスカッション
 - タイムテーブルの確認
- ③ 参加募集告知
- ④ カフェ講座実施

三市（小金井市・国分寺市・小平市）



- ① 講師との打合せ
 - 事業の概要説明
 - 講座内容に関するディスカッション
 - 講座の進行に関するすり合せ
- ② 関係行政への内容連絡
 - 実施内容報告
- ③ 参加募集告知
- ④ カフェ講座実施

3-4 会議の回数と日時と参加者

会議実施実績（表）

	日時	内容	参加者	場所
事前打ち合わせ(三市)	2012/8/29	取り組みの説明	小金井市生涯学習課、小平市生涯学習推進課、 国分寺市社会教育スポーツ振興課 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
事前打ち合わせ(三市)	2012/9/5	全体の構成検討	講師:倉持伸江 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 1 回目(三市)	2012/10/17	実施前打合せ	講師:倉持伸江 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 1 回目(三市)	2012/10/22	講師事前打合せ	講師:倉持伸江 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 2 回目(三市)	2012/10/5	実施前打合せ	講師:竹内千寿恵 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 2 回目(三市)	2012/11/9	講師事前打合せ	講師:竹内千寿恵 東京学芸大こども未来研究所	国分寺市内施設
運営確認打合せ(三市)	2012/11/2	運営確認	講師:倉持伸江 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
運営確認打合せ(三市)	2012/11/30	運営確認	東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 3 回目(三市)	2012/12/7	講師事前打合せ	講師:佐藤宮子、久田邦明 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
(協議会)(三市)	2012/12/19	プロジェクト紹介	小金井市生涯学習課、小平市生涯学習推進課、 国分寺市社会教育スポーツ振興課 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 4 回目(三市)	2013/1/16	実施前打合せ	講師:布昭子 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 4 回目(三市)	2013/1/11	講師事前打合せ	講師:大熊雅士 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 5 回目(三市)	2013/2/7	実施前打合せ	講師:長津芳、天野文隆 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 5 回目(三市)	2013/3/4	講師事前打合せ	講師:上平泰博 東京学芸大こども未来研究所	NPO 法人ワー カーズコープ
事後打合せ(三市)	2013/3/13	事後打合せ	東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学

	日時	内容	参加者	場所
事前打ち合わせ(足立)	2012/8/22	取り組みの説明	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所
事前打ち合わせ(足立)	2012/9/14	全体の構成検討	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所
カフェ講座 1 回目(足立)	2012/10/2	実施前打合せ	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所
カフェ講座 1 回目(足立)	2012/10/22	講師事前打合せ	講師:倉持伸江 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 2 回目(足立)	2012/11/1	実施前打合せ	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所
カフェ講座 2 回目(足立)	2012/11/16	講師事前打合せ	講師:井筒紫乃 東京学芸大こども未来研究所	帝京科学大学
カフェ講座 3 回目(足立)	2012/12/11	講師事前打合せ	講師:鈴木光男 東京学芸大こども未来研究所	東京未来大学
運営確認打合せ(足立)	2012/12/12	運営確認	講師:倉持伸江 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 4 回目(足立)	2013/2/6	実施前打合せ	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所
カフェ講座 4 回目(足立)	2013/2/18	講師事前打合せ	講師:山田修平 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
カフェ講座 5 回目(足立)	2013/2/28	実施前打合せ	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所
カフェ講座 5 回目(足立)	2013/3/7	講師事前打合せ	講師:松田恵示 東京学芸大こども未来研究所	東京学芸大学
事後打合せ(足立)	2013/3/19	事後打合せ	足立区青少年課 東京学芸大こども未来研究所	足立区役所

3-5 協議会組織

本事業実施にあたり、足立区教育委員会子ども家庭部青少年課に協力を得られた。そのため各行政施設への連絡、調整、協力等の依頼は、青少年課の協力により、円滑、効果的にできることとなった。三市でも同様の協力を得られることとなり、各カフェ講座の運営会議の場をもって協議会機能に代えられたため、協議会を組織する方針を変更した。また、初めての取り組みのため、各行政が協議会機能のモデルとなることで、今後、各行政が協議会機能を持ち続けるのではなく、地域の教育支援者によって協議会が組織されていくことをねらいとしながら行った。

3-6 告知方法

3-6-1 既存の告知方法の利用

- ① 一般社団法人教育支援人材認証協会のメールマガジン（約 2000 人）
東京学芸大こども未来研究所が一般社団法人教育支援人材認証協会のメンバーであることから、同協会のメールマガジン（毎月 2 回発行）に情報、参加の呼びかけを掲載し、参加者を募集した。
- ② 東京学芸大こども未来研究所の講座受講者メールマガジン（約 130 人）（足立区内）
東京学芸大こども未来研究所の実施した講座受講者に対する、メールマガジンを利用し、毎回のカフェ講座への参加を募集した。
- ③ 「地域の活動リーダーへの声がけ」（約 50 人）
これまで当研究所と交流のあった、地域の活動者への個別メールを送信し、参加の募集を行った。

3-6-2 新規の告知方法

- ① チラシ
今回作成したチラシを、足立区、小金井市、小平国分寺市のそれぞれの区市役所、地域施設に設置し民への広い参加を求めた。
- ② Facebook
東京学芸大こども未来研究所の Facebook ページから毎回のカフェ講座実施の案内を発信した。



市、市
ら、

3-7 カフェ講座の参加者

通算のカフェ講座の参加者数は、のべ142名(途中参加者に関しては、数に含んでいない)であった。そのうち、足立区は36名の参加、三市では106名の参加をすることができた。(図3-7-1、図3-7-2)

三市における、4回目と5回目のカフェ講座の間にある、「option」日は、広域な三市地域において、交流の予備日として設定したものである。通常のカフェ講座とは異なり、講座を伴わない交流のみの回であったためか、参加者数が低くなった。

参加者数を開催回数で平均すると約13名(12.9名)の参加となる。参加呼びかけ定員を各回30名としていたので、全体として約43%の参加率となった。

参加者数が少なかったのは残念であるが、その参加者を質的にみたものが、図の3-7-3、3-7-4である。

両グラフは、毎回の参加者のうち、新規で参加した参加者と、継続(1回以上)参加した参加者の数を示している。そのため、全員新規参加者となる1回目については、グラフの中に記載していない。

足立のグラフ(図3-7-3)からは、新規と継続の参加者の割合が常に同数であったことがわかる。交流の場としての割合として、理想的な数字として捉えられる。

三市の場合は、三地域ごとに毎回会場が変わることがカフェ講座実施の前提なので、継続の参加が起こりにくい条件である。2回目の継続参加者が多いことは、初回と同じ小金井市内であったこともあるが、初回の満足度が高かったこと、カフェ講座という仕組みへの期待も高いことが伺える。2回目から3回目にかけて、新規の参加者が増えていることが分かる。会場となった小平市でのカフェ講座のニーズが伺える。また、4回目には、再び継続参加者が増えている。カフェ講座の最終回にはそれまでの回よりも、継続参加者、新規参加者が増えていることから、三市においては、カフェ講座の仕組みが根付き始めたこととして捉えることができる。

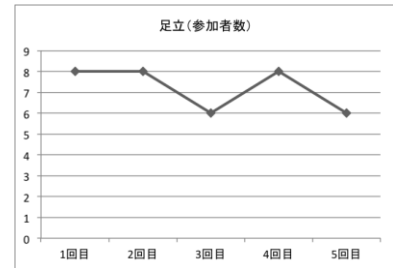


図 3-7-1

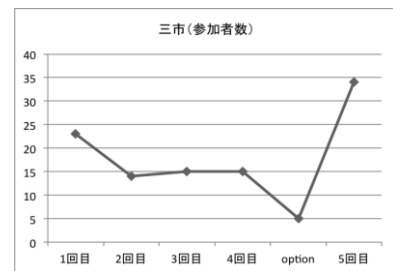


図 3-7-2

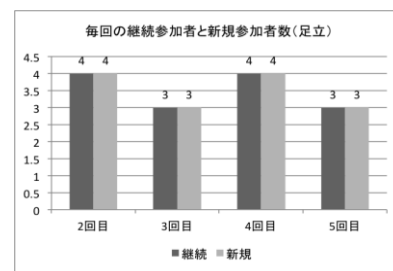


図 3-7-3

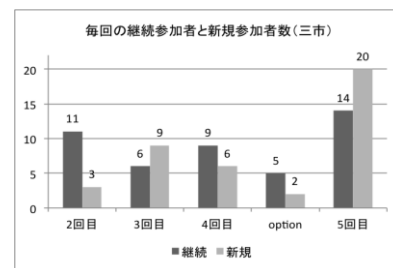


図 3-7-4

3-8 実施時間

カフェ講座の実施時間を設定するには、どのような参加者を想定するかによるところが大きい。時間の設定によって参加者像が変わってしまう。そこで、なるべく地域の特性を考慮して参加しやすい時間帯を設定した。

足立区では、自治体の実施した講座を受講した方々を主なターゲットとすることで、既にグループに所属しながら活動を行なっている方々だけでなく、未だ活動のグループに所属していない、これから活動を始めたいと考えているような方々の参加を想定した。また、足立区の地域特性として、仕事を行いながら地域活動を行っている方を想定したため、18:30 開始、21:00 終了という夜間でのカフェ講座実施とした。

結果として、想定した対象の特徴であるスーツ着用の参加者も見られた。夕方は、仕事以外にも忙しい時間帯になるので、遅れて参加する方も多く見られた。参加者の年齢層は比較的若く、働き盛り年代の参加者が多かった。

諸々考えた結果の時間設定であったが、夕方、夜間には様々な用事があるためか、期待したほど参加者が得られなかった。

三市では、三地域をまとめた形で実施することから、既にグループに所属しながら活動を行なっている方々の参加をターゲットとした。

活動のフィールドとしては、学校関連（放課後子ども教室、学習支援）としたため、日中は比較的調整しやすいのではないかと想定した。

交流の継続が可能ないように、カフェ講座の後にそのままランチへ移動できるような時間とすることとし、午前中を実施の時間として設定した。

一時間の講座と一時間半の交流として、9:30 開始、12:00 終了という実施時間とした。

参加者は、年齢層が比較的高く、女性の割合が多かった。今、子育てをしている方、子育ての後支援活動を行っている参加者が多かった。一方、仕事を行いながら活動している人は参加できない時間帯となったため、行政からの参加を除き、働き盛り年齢の男性の参加は見られなかった。

3-9 講座（講師の選定について）

<足立区>

足立区の場合は、自治体を実施した講座を受講した方々を主なターゲットとすることで、既にグループに所属しながら活動を行なっている方々だけでなく、未だ活動のグループに所属していない、これから活動を始めたいと考えているような方々の参加を想定した。

また、足立区内で新たに行われはじめている、大学と地域との連携というフレームに支援者が関わることで、効果的な活動参加を期待し、講師の選定においては、地域大学（帝京科学大学、東京未来大学）の教員へ依頼することとした。

足立区青少年課との協力体制のもとでカフェ講座を実施する体制が取れたことで、足立区内の地域大学との連携を円滑に図ることが可能となり、実現することができた。

講座進行は各回の講師に進めていただく形とし、地域活動者のゲストには実践的な体験をご紹介いただく立場として進行することとした。

講師には、大学と地域との繋がりのお話もふれていただき、より広い視点で地域活動の連携を考えることを狙った。

講師との事前打合せでは、専門の内容を参加者に伝えることの依頼と共に、「連携」を意識するようなキーワード設定を事務局側が提案し、参加者の様々な活動分野に共通できる学びとなるよう工夫をした。

各回の設定キーワードは以下のとおりである。

- ① 他者との関わり、相互理解（vol.1）
- ② 楽しさ、オープンマインド、ルール的重要性（vol.2）
- ③ 環境、手の可能性、経験の扱い（vol.3）
- ④ 運営、課題の確認、調整の技術（vol.4）

テーマ性を持たせながら、講師を囲んで和やかに情報交流を行うといった形での講座となるように配慮した。

<三市（小金井・国分寺・小平）>

三市の場合は、三地域をまとめた形で実施することから、既にグループに所属しながら活動を行なっている方々の参加を想定した。そのため、講師の選定にあたり、すでに広く活動の範囲を持っている方が参考になりやすいのではないかと考えた。そこで、メインは地域のリーダー的活動者に発表を行って頂き、大学教員による専門的知見で補足、フォローをしていただくような形で進行するように設計した。

三地域という広い地域、多様な地域性をもとに、それぞれの地域の先駆的活動を参加者に知ってもらい、刺激としてもらいたいという狙いがあったためである。

三地域のリーダー的活動者を選定し、それぞれの講師は他地域で話すようにした。自分の地域で話すのではなく、小平市の活動を小金井市で、小金井市の活動を国分寺市で、国分寺市の活動を小平市でというように、ゲストの活動地域とカフェ講座実施会場とをシャッフルして実施することで、他地域の活動者との出会いや、成功事例などを創発させるよう配慮した。

講座内では、地域のゲストとコメンテーターの両方が、プレゼンテーションを行うことで、異なったアプローチでテーマを深めることにつながった。

毎回、コメンテーターのプレゼンテーションを後半とすることで、前半の内容を参照しながら、さらに深めて理解するような形となった。コメンテーターはすべて大学の教員なので、臨機応変に対応できる、場慣れした経験値に依るところが大きい。

全体として地域での活動者の実践事例をもとにしながら、多様な視点で情報交流を行えるような形の講座となるように配慮した。

3-10 各回の講座内容

2012.10.26 三市 vol.1

実施日時	10月26日(金) 9:30~12:10
実施場所	こどもモードハウス (東京学芸大学)
参加人数	23名
講師	倉持 伸江(東京学芸大学)
講座概要	<p>テーマ：生涯学習にみる活動の理想型とは？ - 他者との関わり観の観点よりラウンドテーブル 実践を語り合い、聴き合う。</p> <p>4グループに分かれ、1グループに一人、ファシリテーターがつき、一人10分ずつ、自分のことをじっくり語る。聴く側は、口をはさまず、否定をせず、ポジティブに話を聴く。</p>
カフェ概要	<p>座るテーブルを移動し、自分の座っていたテーブルの方たちの他己紹介を含めて、自己紹介を行う。そのあと、自由にフリートークを行った。</p> <p>発達支援のサポートについて、工作を出前で行いたい、放課後子ども教室の他市の状況把握等の話題が出ていた。</p>
参加者の感想	<p>傾聴することが大切だということがよくわかった。</p> <p>いろいろな方と様々な話ができてよかった。</p> <p>もっと話したかった。時間が足りなかった。</p>
所感	<p>とにかく、みなさんよく話をされていた。意外に人に自分の話を10分間も話すこともなく、話を始めるととどまらない様子であった。話をする場が欲しいとも思っているようであった。</p> <p>また、各テーブルに1名ファシリテーターを置いたのもよかった。</p>



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

倉持先生は、ご専門の生涯教育の観点で、「お互いを理解することが大事」というお話からスタート。参加者の皆さんは5つのテーブルに分かれて、まずは活動の内容を一人5分間ノンストップで話しました。途中で割りこんではいけないルールです。はじめは「5分なんて話せるの？」とみなさん心配されていましたが、話し始めるとどんどん話してしまうところが不思議です。中には時間をオーバーしてしまう人も。「十分に話す」「十分に聞く」といった、相手に自分を「開く」効果について学びました。

実施日時	10月26日(金) 18:30~21:00
実施場所	綾瀬ブルミエ (足立区勤労福祉会館)
参加人数	8名
講師	倉持 伸江(東京学芸大学)
講座概要	<p>テーマ：生涯学習にみる活動の理想型とは？ - 他者との関わりの観点よりラウンドテーブル 実践を語り合い、聴き合う。</p> <p>3グループに分かれ、1グループに一人、ファシリテーターがつき、一人10分ずつ、自分のことをじっくり語る。聴く側は、口をはさまず、否定をせず、ポジティブに話を聴く。</p>
カフェ概要	<p>座るテーブルを移動し、自分の座っていたテーブルの方たちの他己紹介を含めて、自己紹介を行う。そのあと、自由にフリートークを行った。</p> <p>コミュニティカフェを運営したいと思っている参加者や、子どもの図書活動支援などの話が聞かれた。</p>
参加者の感想	<p>楽しい会話で過ごし、あっという間にすぎました。</p> <p>カフェがセットなのは良いと思う。</p> <p>自分のやりたいことをもう一度見直す機会ができ、良かった。</p>
所感	<p>10分間という長い時間だが、みなさんよく話をされていた。話すことを通じて、相互の理解を深めていた。参加者すべて同じ時間で話すということは、聞く側にとっても聞く体制を作りやすいようだった。</p>



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

倉持先生は、ご専門の生涯教育の観点で、「お互いを理解することが大事」というお話からスタート。参加者の皆さんは5つのテーブルに分かれて、まずは活動の内容を一人5分間ノンストップで話しました。途中で割りこんではいけないルールです。はじめは「5分なんて話せるの?」とみなさん心配されていましたが、話し始めるとどんどん話してしまうところが不思議です。中には時間をオーバーしてしまう人も。「十分に話す」「十分に聞く」といった、相手に自分を「開く」効果について学びました。

実施日時	11月24日(土) 9:30~12:00
実施場所	小金井市前原暫定集会施設 会議室B
参加人数	14名
講座概要	<p>■ゲスト：竹内 千寿恵 (MyStyle@こいだいら)</p> <p>テーマ：連携プロジェクトをつくろう</p> <p>①</p> <p>コミュニティビジネスを支援する事業を展開する中での様々な事例から、ネットワークづくり、連携プロジェクトの意義を考える。</p> <p>■コメンテーター：倉持 伸江 (東京学芸大学)</p>
カフェ概要	<p>3つのテーブルに別れ、自己紹介を5分間ずつ行い、後は、竹内講師の話をきっかけとして、フリートークを行う。自分のやりたいこと等が、話題の中に出てきていた。</p>
参加者の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく有意義な時間でした。 ・地域で作ったお話を聴き、バイタリティのすごさに敬服しました。 ・同じグループのみなさんからは、役に立つ情報をたくさんいただけて今後の活動が広がりそうだと感じました。
所感	<p>前半の話が長めになり、後半のカフェタイムの時間がやや短くなってしまった。短時間の中で、みなさん情報交換をしようと、話が盛り上がっていた。</p> <p>話し合う中で、自分のやりたいことを自然に話される人が出てきて、それに対して、みなさん否定をしないで意見交換もできていた。</p>



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

小平を中心に活動している竹内さんからは、もともと主婦仲間の集まりから「地域ビジネスの立ち上げを支援」する団体を立ち上げた経験談をお話いただきました。連携を広げるポイントは、支援する気持ちを横につなげていくことと、ノウハウを伝え合う場づくり。後半には倉持先生からの相互理解へのアドバイスのもと、自分のやりたいことを自然に語らう、「聞き上手」「話し上手」なカフェタイムとなりました。

実施日時	11月28日(水) 18:30~21:00
実施場所	綾瀬ブルミエ (足立区勤労福祉会館)
参加人数	6名
講師	井筒 紫乃 (帝京科学大学) 川口 明彦 (あちこち会)
講座概要	テーマ：“楽しい”からはじまる地域づくりー子どもと楽しむ連携とはー講師のスポーツを通じた活動経験をもとに、連携についての内容に触れ、同じくスポーツの面から、地域のゲストとともに子どもとの関わり方などについて話し合った。NASAが行っているという、コンセンサスゲームを通して、参加者同士の相互理解を図り、カフェ交流への流れをつくった。
カフェ概要	参加者それぞれが、どのような活動を行い、どのような目標を持っているかについて、講師も輪に入り話し合った。
所感	知らない者同士が交流を図るためにどのような内容の講座を行うのかについて、講師と内容を詰めた結果、コミュニケーションのきっかけに、ゲームを行うことが有効であるとして、コンセンサスゲームを行った。 ゲームというルールによって、目標や参加の方法が分かりやすくなるということは、講師のスポーツの経験を通して伝えたかったキーワードが分かりやすく伝わる方法と感じた。



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

井筒先生のご専門である体育の観点で、“楽しい”からはじまる地域づくりー子どもと楽しむ連携とはーとして、先生のマラソン日本代表選手時代のエピソードなどを交えながら、元バレーボールの国体選手である地域のゲスト川口さんと、スポーツの中にある「チームワーク」や、「楽しさ」など、子どもとのコミュニケーションについてお話いただきました。チームワークについてはアメリカのNASAが行っている「コンセンサスゲーム」を通じて、1人で考えるよりも複数人で考えるほうが、より総合的で合理的な判断ができるということを参加者の皆さんと確認しました。

実施日時	12月15日(土) 9:30~12:00
実施場所	小平市福祉会館
参加人数	15名
講座概要	<p>■ゲスト：佐藤 宮子（小金井子育て・子育てネットワーク協議会）</p> <p>テーマ：連携プロジェクトをつくろう②</p> <p>ご自身の活動の経緯や、協議会ができるまでのいきさつ、現在の活動を話していただき、ネットワークすることの意味を考える。</p> <p>■コメンテーター：久田 邦明（東京学芸大学）</p> <p>茶堂について、また、コミュニティカフェの話、地域の居場所づくりの話、連携してうまくいくコツなどを話された。</p>
カフェ概要	<p>3グループに別れ、簡単な自己紹介後、「やれること」「やりたいこと」「課題に思うこと」を各自であげてもらい、グループで共有した。</p> <p>共有するにとどまった。</p>
参加者の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・ こういう集まりを継続して欲しい。 ・ 既存のNPOに入って活動することを希望する。 ・ テーブルトークで話し合うことの焦点が今ひとつはっきりしなかったと思う。 ・ ネットワークの第1歩 ・ できることも必要だが、目標をはっきり持つこと ・ 旧地縁組織とうまく連携することで広がるということに着目。



<カフェで交わされた意見>

やれること

- ・ あいさつ、ごみ拾い
- ・ 情報収集活動
- ・ 世代を超えた交流

やりたいこと

- ・ 不登校が絡んでの居場所づくり
- ・ おせっかいなおばさん+専門的な人のいる居場所

若者の居場所

- ・ 親のサロン
- ・ 配慮の必要な子どもへの支援
- ・ 学級のサポート

小平市内で一緒に子育て支援活動をする仲間が欲しい

- ・ ネットワークづくり
- ・ 本人が自ら気づけるように関わられるようなファシリテーターを目指したい。
- ・ サポートに必要なスキルを身につけたい。

三市の市民活動で市民協働の推進協議会をつくりたい。

三市で市民協働支援センターを共同でつくりたい。

課題

- ・ 行政の縦割り
- ・ 中間支援組織のあり方
- ・ 民生児童委員などの組織の不備

<ニューズペーパーでの紹介記事>

※添付資料参照

佐藤さんは、様々な活動をネットワークすることについてお話いただきました。ご自身が活動している「小金井子育て子育てネットワーク協議会」の関係づくりを通して、「いろいろな情報にふれながら自分をマッチングさせていく」とったノウハウをお話していただきました。コメンテーターの久田先生からは「茶堂」と呼ばれる、古く街道にあった「コミュニティカフェ」のお話から、古くからの活動との接点をもつことのススメについて学びました。カフェタイムは参加者の皆さんの「課題に思うこと」「やりたいこと」「やれること」がボードに書き出され、交流の話題のきっかけとなりました。



実施日時	12月17日(月) 18:30～21:00
実施場所	綾瀬ブルミエ (足立区勤労福祉会館)
参加人数	6名
講師	鈴木 光男 (東京未来大学) 八木下 久美子 (放課後子ども教室)
講座概要	テーマ：地域で支えるものづくりと子どもの育ち 参加者それぞれの自己紹介から始まり、講師が適宜話題を振り、参加者を交えながら進行し、講師のプレゼンテーションを行った。 キーワードは、子どもの環境破壊、交流する重要性、容量を広げること、他者とつながる重要性。
カフェ概要	参加者から新しい取り組みの提案と発表があった。前回の参加時に、ご夫婦で参加され、交流の中から活動のアイディアを得た。提案に対して、参加者から様々なフォロー意見が出された。
所感	参加者それぞれの話題を引き出して、全員でそれを聞くような流れで進行してくださったが、途中、参加者が長く話し始め、その後に想定していた参加者同士の交流の時間が少なくなってしまうことが残念であった。 参加感を上手につくりながら進行できる方法だが、話を割ることができず、全員話す時間を確保する必要があるので、進行が難しい。



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

鈴木先生のご専門は美術教育。子どもたちが描いた絵のお話から、「子どもの環境破壊」が既に深刻な状況であるというショッキングなご指摘。また、大人が関わることで、子どもの創造力や遊びを壊してしまうこともあると、ゲストの八木下さんも、足立の遊び場についてふれ、参加者も巻き込みながら、遊び場や公園のあり方、学びをトータルで考える地域のあり方について議論しました。交流カフェでは、参加者の方から新しい取り組みアイディアの発表があり、参加者全員で知恵を絞りました。

実施日時	1月19日(土) 9:30~12:00
実施場所	国分寺ひかりプラザ 203・204
参加人数	15名
講師	布 昭子(まなびアンテナ) 大熊 雅士(東京学芸大学)
講座概要	地域ゲストの布さんからは、情報誌「まなびアンテナ」を用いながら、活動紹介など、プレゼンテーションがありました。 大熊先生は、プロジェクターを使ったプレゼンテーションを通して、活動が広がっていくためのコツをおはなし頂きました。
カフェ概要	参加者同士でご自身の活動を話し合い、持参した資料や、工作教室の作品などを話題にしながら、活動を広げる交流を図りました。
所感	各テーブルで活発に交流が行われていた。 行政の職員も参加し、参加者や他の行政職員と共に語らい、情報交換などを行っていた。 交流会の後に、講師を囲んでランチを取るなど、積極的な交流が見られた回だった。 継続して参加している方が、相互理解を深めて、具体的な活動の話が始まるなど、これまでの成果が実り始めた回であった。



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

布さんは、学校支援コーディネーターとなるまでの、多くの出会いと助けが得られたご経験をお話いただきました。ポイントは「学びアンテナ」という情報誌の編集。情報を集め、人との出会いを活動につなげていく「巻き込み力」について学びました。大熊先生は、木登り遊びから、人が人を呼び、地域の遊び場づくりに展開した事例と、「ハチドリの一とせずく」という本を参照し、小さな行動に使命感をもって続けていくことへのエールをいただきました。

実施日時	2月22日(金) 18:30~21:00
実施場所	綾瀬プルミエ (足立区勤労福祉会館)
参加人数	8名
講師	山田 修平 (淑徳短期大学) 山下 誉裕 (あちこち会)
講座概要	講師の行っている子どもの場所づくりに関して、運営のノウハウや、課題の解決方法など、プレゼンテーションを行った後、2つのグループに分かれ、現時点での活動の課題点、活動のやりがいとは何か、他の人の意見をどのように受け止めれば良いのか、など、付箋紙を使いながら、ワークショップ形式で、進化した。
カフェ概要	カフェは特に時間を分けずに、講師の行ったワークショップで出てきた意見を掲示し、その掲示物を見ながら参加者同士でコミュニケーションを図るといった内容だった。
所感	はじめての参加者が、分けられたグループ内でコミュニケーションを取り始めるのには、そんなに時間がかからなかった。意見を付箋紙に出しながらコミュニケーションを進めていくということは、意見が可視化され、コミュニケーションを活性化することが明らかになった。 今回の話題は「運営」であったが、活動をするうえで、誰もが課題に思うことにテーマを絞って交流することで、意見やアイデアが出し易いということも確認できた。



<ニューズペーパーでの紹介記事>※添付資料参照

山田先生が実践されている、子どものあそび場づくりや、その運営の苦労のお話から、運営の工夫や、接し方のノウハウを伝授していただきました。ポイントは「活動の根っこ」の確認。何を目指すのかをはっきりさせてからはじめること。接し方としては「8:2の法則」。いつも2割は相手に委ねるおおらかさをもつ態度について学びました。

ゲストの山下さんからは、日頃の学童クラブでの子どもたちとの日常現場のお話をいただき、参加者の方々と、現在の活動で困っていることをお互いに出し合い、参加者同士でもアドバイスを行うなど、具体的な課題をもとに交流を行いました。

実施日時	3月8日(金) 14:00~16:30
実施場所	国分寺Lホール
参加人数	34名
講師	松田 恵示 (東京学芸大学) 上平 泰博 (NPO 法人ワーカーズコープ) 長津 芳 (小金井第七小学校) 天野 文隆 (小金井市) 季高 一成 (小平市)
概要	<p>研究員からのカフェ講座の取組説明、各回の紹介などを行い、その後、パネルディスカッション形式で、講師の方々が登壇し、それぞれの教育支援に対する取組や、事例などを紹介した。</p> <p>長津先生からは、小学校で行われている、地域の教育人材との取り組みに関して具体的な紹介を行っていただいた。</p>
カフェ概要	<p>最も多い参加者の回であったので、机の数も多く、グループも多くなった。そこで、時間を区切って、席替えを提案することや、グループで話されていたことをマイクから全体に向かって紹介するなどの進行を行い、なるべく多くの参加者同士が交流できるよう工夫した。</p>
参加者の感想	<p>出会いの中に「学び」がある。色々な方の経験をお聞きすることにより、自分の迷いや不安を解消する糸口が見つかります。このような企画を模倣していただいてありがとうございました。</p>
所感	<p>人数が多いと、交流会としても大いに盛り上がり、カフェスペースも忙しくなるが、会場の壁面に用意した参加者の情報掲示板にも人が集まり、それぞれの活動チラシを持って帰ることや、チラシの主に問い合わせがあるなど、さまざまなポイントで交流が生まれるということが明らかになった。</p> <p>参加者それぞれが、会話する事のできる人数がある程度限られるため、掲示板や、マイクタイムなどの工夫が必要となる。</p>



実施日時	3月9日(土) 13:30~16:30
実施場所	中央本町地域学習センターレクホール
参加人数	6名
講師	松田 恵示 (東京学芸大学) 木内 菜保子 (東京未来大学)
講座概要	<p>研究者からのカフェ講座の取組説明、各回の紹介などを行い、その後、講師によるコミュニケーションワークを行った。交流のカフェとワークを交互に行い、コミュニケーションが多く図られるよう工夫した。</p>
カフェ概要	<p>カフェの時間は、講師が輪の中に入り、大学と地域との話や、参加者の活動の話などを語りながら交流した。</p>
参加者の感想	<p>やはり何か子どもに関しての活動をしたいと思って参加しました。 様々な活動で活躍されている人たちとお話ししたかった。 子どもとのかかわりについて少しでも学びたいと思いました。 大人が子どもに帰ることができて楽しい(ワークの感想) 本当に充実した1日でした。 参加者ももっと呼びかけた方がいいと思いました。 まるで知らなかった分野のことを学べてとても自分にとって有益だと思いました。</p>
所感	<p>まとめの交流会であったが、交流をより促進するため、コミュニケーションワークを行った。内容は、グループの意思疎通を図るものをメインとして、3種類のプログラムを行った。 参加者が楽しんでいる様子が見られたので、カフェ講座が提供する内容の中に、コミュニケーションを媒介にしたレクリエーションの有効性を確認することができた。 普段の生活では経験することが無くなった、子どものような気分というもの、交流において重要であることが確認された。</p>



3-11 カフェ（交流の場づくり）

カフェの雰囲気づくり

今回のカフェ講座は、「カフェ」や「交流」をキーワードとしていることから、「雰囲気づくり」を重視した。普段利用しているカフェのような雰囲気であれば、講師との距離も近く感じて気軽な質問ができ、参加者のコミュニケーションも円滑となり、連携や交流が生まれやすいのではないかと考えたからである。「カフェ」として提供するものは以下のものを基本とした。

受付横にカフェコーナーを用意し、音楽をかけるなどして、参加者にわかりやすく表示した。コーヒー、紅茶、緑茶の三種類の飲料を用意し、参加者が好きなものを選べるようにした。参加者がオーダーしたものを、その場でスタッフが用意するという形式を取り、紙コップで提供した。インスタントやペットボトルといった簡易なものでは、「カフェ感」が出ないということと、ある程度の「手間」を見せるようにすることで、コミュニケーションの生まれるきっかけとなることを狙った。特に、コーヒーはその都度、挽いた豆をドリップする方法とし、雰囲気づくりのメインとした。チョコレート、クッキー、塩気のあるクラッカーといった、三種の菓子を皿にのせて提供した。

参加者には受付後、カフェコーナーで飲料ができるのを待つ間に、スタッフや参加者同士でコミュニケーションを取るように促した。このことで、カフェコーナーをコミュニケーションのステーションとして意識付けすることを狙った。



3-12 カフェ講座の進行方法（タイムテーブルと進行役）

カフェ講座の内容として、「講座」と「交流」という二つのコンテンツを設定したが、時間配分としては、下記の図（3-12-1 から 3-12-11）のように行った。

	内容	進行役
18:30	開始・ガイダンス	研究員
18:45	主旨説明(講座)	講師
19:00	相互理解トーク(交流)	
19:15	↓	
19:30	↓	
19:45	↓	
20:00	↓	
20:15	↓	
20:30	↓	
20:45	トーク終了	
21:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-1 足立 vol.1

	内容	進行役
18:30	開始・ガイダンス	研究員
18:45	講師トーク(講座)	講師
19:00	↓	
19:15	交流ゲーム(講座)	
19:30	↓	
19:45	↓	
20:00	↓	
20:15	↓	
20:30	カフェ開始	フリー
20:45	↓	
21:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-2 足立 vol.2

	内容	進行役
18:30	開始・ガイダンス	研究員
18:45	講師トーク(講座)	講師
19:00	↓	
19:15	↓	
19:30	↓	
19:45	↓	
20:00	↓	
20:15	↓	
20:30	↓	
20:45	↓	
21:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-3 足立 vol.3

	内容	進行役
18:30	開始・ガイダンス	研究員
18:45	講師トーク(講座)	講師
19:00	↓	
19:15	ディスカッション1(講座)	
19:30	↓	
19:45	↓	
20:00	ディスカッション2(講座)	
20:15	↓	
20:30	↓	
20:45	↓	
21:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-4 足立 vol.4

	内容	進行役
13:30	開始・ガイダンス	研究員
13:45	活動報告	
14:00	講師トーク(講座)	講師
14:15	交流ワーク(講座)	
14:30	↓	
14:45	カフェ開始(交流)	フリー
15:00	↓	
15:15	交流ワーク(講座)	講師
15:30	↓	
15:45	↓	
16:00	カフェ開始(交流)	フリー
16:15	↓	
16:30	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-5 足立 vol.5

	内容	進行役
9:30	開始・ガイダンス	研究員
9:45	主旨説明(講座)	講師
10:00	相互理解トーク(交流)	
10:15	↓	
10:30	↓	
10:45	↓	
11:00	↓	
11:15	↓	
11:30	↓	
11:45	トーク終了	
12:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-6 三市 vol.1

	内容	進行役
9:30	開始・ガイダンス	研究員
9:45	ゲストトーク(講座)	ゲスト
10:00	↓	
10:15	↓	
10:30	主旨説明(講座)	講師
10:45	相互理解トーク(交流)	フリー
11:00	↓	
11:15	↓	
11:30	↓	
11:45	トーク終了	
12:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-7 三市 vol.2

	内容	進行役
9:30	開始・ガイダンス	研究員
9:45	ゲストトーク(講座)	ゲスト
10:00	↓	
10:15	講師トーク(講座)	講師
10:30	↓	
10:45	カフェ開始	フリー
11:00	↓	
11:15	↓	
11:30	↓	
11:45	カフェ終了	
12:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-8 三市 vol.3

	内容	進行役
9:30	開始・ガイダンス	研究員
9:45	ゲストトーク(講座)	ゲスト
10:00	↓	
10:15	講師トーク(講座)	講師
10:30	↓	
10:45	カフェ開始	フリー
11:00	↓	
11:15	↓	
11:30	↓	
11:45	カフェ終了	
12:00	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-9 三市 vol.4

	内容	進行役
10:00	開始・ガイダンス	研究員
10:15	カフェ開始	フリー
10:30	↓	
10:45	↓	
11:00	↓	
11:15	↓	
11:30	↓	
11:45	↓	
12:00	カフェ終了	研究員

図 3-12-10 三市 option

	内容	進行役
14:00	開始・ガイダンス	研究員
14:15	活動報告	
14:30	参加者の声	
14:45	パネルディスカッション	講師
15:00	↓	
15:15	↓	
15:30	カフェ開始	フリー
15:45	↓	
16:00	↓	
16:15	カフェ終了	
16:30	カフェ講座終了	研究員

図 3-12-11 三市 vol.5

各図は、ピンク色、黄色で示したものが、講師・ゲストによる進行時間、青色で示したものが参加者同士それぞれ交流を行った時間を表にしたものである。

- 1 講座と交流の時間を分ける方法：足立 vol.2・5、三市 vol.2・3・4・5、
- 2 講座と交流の時間を分けない方法：足立 vol.1・3・4、三市 vol.1

として分類できる。2の「講座と交流を分けない方法」というものは、「講師による講座の中に交流を図るプログラムを入れ、講師による進行で交流を図る方法」と言い換えることができる。

本事業は、講師により、テーマ性をもった投げかけを行い、参加者同士の交流を図る方法と、講座の時間と交流の時間を分け、参加者同士がおのおの交流を図る方法の2つのアプローチで実施した。

3-13 交流への空間的な工夫（会場レイアウト）

交流を促す空間についても検討することが有効と考え、いくつかのアプローチで会場レイアウトを行った。

- 1 テーブルを分ける方法（三市 vol.1・3・4・5、足立 vol.1）（図 3-13-1）
- 2 一つの大きなテーブルとしておく方法（足立 vol.2・3・4）（図 3-13-2）
- 3 テーブルを用いない方法（三市 vol.2）（図 3-13-3）
- 4 途中でレイアウトを変える方法（三市 vol.2）（図 3-13-3 から図 3-13-1）

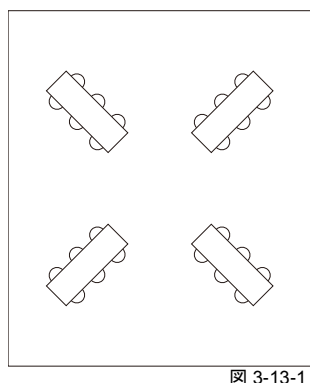


図 3-13-1

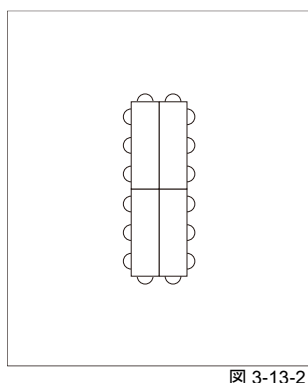


図 3-13-2

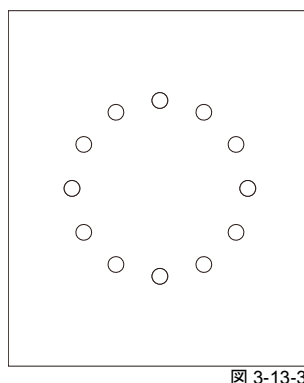


図 3-13-3

図 3-13-1 のレイアウトについては、人数の分割が容易であるが、顔を知っている者同士の着席になりやすい。図 3-13-2 では、全員が顔を見合せて座るので、知っている者同士が隣り合って座っても、対面する者が知らない人という着席になりやすい。図 3-13-3 は、図 3-13-2 と同じ効果が得られるが、対面の距離は広くなるので、コミュニケーションは生まれにくいようであった。

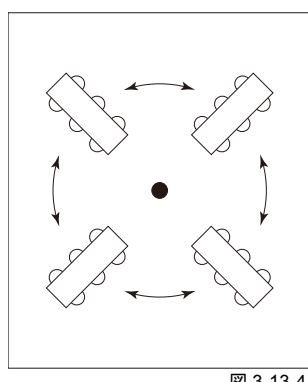


図 3-13-4

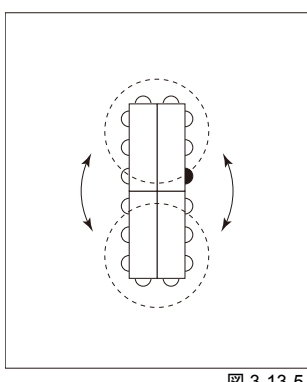


図 3-13-5

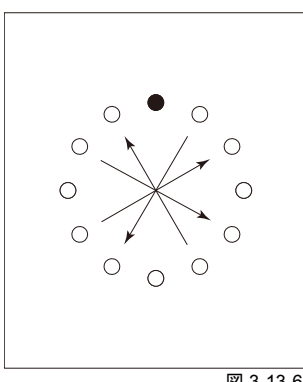


図 3-13-6

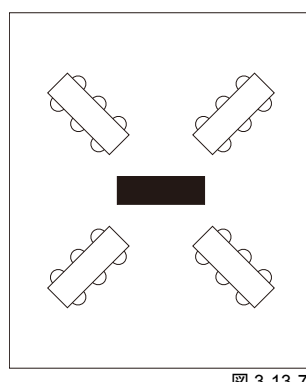


図 3-13-7

上の図は、それぞれの会場構成に、講師などのプレゼンターを黒い丸、参加者の動きを矢印で模式的にあらわし、使い方を示したものである。図 3-13-4 では、レイアウトに中心性があるので注目しやすく、背を向ける人がいないこともメリットであった。交流では、コミュニケーションがグループ内で閉じられやすく、席替えなど進行上の工夫が必要だった。図 3-13-5 では、比較的自由にグループの人数をつくれたようである。机の中心部は、両サイドのグループの話題に入りやすく、輪をつなげることや、分割するなど、進行の工夫をその

ままコミュニケーションにつなげることができた。図 3-13-7 のように中心にカフェスペースを設置することで、立ち話が起こるなど、「カフェ感」の雰囲気づくりにも効果があった。

3-14 チラシ・ポスター

「カフェ講座」という名称から、カフェでのメニューを想起させるようなデザインのチラシを作成した。

チラシの制作にあたっては、メールやウェブサイトなど、高度な携帯の操作やPCの操作に不慣れな人を対象にした告知方法としての効果を期待した。

カフェ講座への参加者から「これまでとは異なり、比較的若い人が参加する交流会だと思った」という声も聞かれた。

チラシの与える印象が、参加者の期待に深く結びついているということが確認されたといえる。また、活動者の中には、より若い人と交流したいというニーズがあることがわかった。

チラシ・パンフレットには、「持って歩いてもおかしくない」という視点があり、内容だけの吟味だけでなく、見え方の吟味、催し物との関連性について気を配ることも有効であると分かった。

また、参加者の手元、かばんの中にチラシ、パンフレットが入っていることが多く、「持ち歩く」、「ファイリングする」ことが、チラシ・パンフレットの重要なメリットであることも参加者の行動から察することができた。

活動の履歴としての位置づけや、学習内容、参加して気づいたこと、思ったことなどを書き留めておく参加者もいることなどから、他の講座やセミナーの内容と併せて、自分なりの「生涯学習ノート」を作成しているようであった。今後、メモ欄などを付加することも検討する必要がある。

一方、印刷部数、配布場所数に比べてどれだけリーチしたのかに関しては不明なところがあり、費用対効果としては検討が必要である。



3-15 講座スタイルについて

全カフェ講座を、講座のスタイルとして捉えた場合、参加者の参加感も含めていくつかに分類できる特徴が現れた。以下にそれぞれ、メリットとデメリットをまとめる。

レクチャー型

三市 (vol.2 (倉持・竹内)・vol.3 (佐藤・久田)・vol.4 (布・大熊))

講師もしくはゲストが準備してきたプレゼンテーションを、参加者の正面より、まとまった時間をもって紹介する形式。一般的な講座の形式。

<メリット>

- ・講師の体系立ったプレゼンテーションを聞くことができる。
- ・写真・図をもとに話をすることができる。
- ・内容が短時間で多くの情報量を伝えることができる。

<デメリット>

- ・すべて聴き終わってから質問をすることになる。
- ・参加者の興味の方角へ話題を向けることができない。

<その他>

- ・会場の方向が、スクリーンに向かうので、場の雰囲気がどうしても硬くなるのだが、スクリーンの前から離れ、各テーブルへと動きまわって話すなど、場の雰囲気を変えるような工夫も見られた。(大熊)
- ・「カフェ」という雰囲気ではなく、「講座」という雰囲気が強くなるレイアウトといえる。

ゲーム型 (足立 vol.2 (井筒・川口))

ゲームを通してコミュニケーションを図り、ゲームを通して学びの結果を得る形式。講師はゲームの中には入らない。

<メリット>

- ・目的を与えられるので、グループ内での会話が容易にはじめられる。
- ・ゲームなので、楽しんですすめることができる。
- ・意見の相違によって気分を害することがない。

<デメリット>

- ・本来意図したような会話ができない。
- ・設定が前提のゲームなので、実際の場面への応用が難しい。

<その他>

- ・コンセンサスゲームを行ったので、モデルとしてのコミュニケーションを行い、複数の知恵を絞った方が、個人の考えよりも優れた結果が出るということが、楽しく理解できた。
- ・交流やコミュニケーションを行う前のグループ作りにおいて、「導入」としての利用価値が高い。

ファシリテーション型（足立 vol.3（鈴木・八木下））

参加者に話題を振り、語らせながら進行し、参加感をつくり出していく。それにより、参加者の理解の導入をつくり、講師も参加者の一人のような形で話を進行していく形。

<メリット>

- ・講師が話題の中心となる司会者なので、皆が会話に参加する。
- ・講師とのコミュニケーションが多く、他の参加者もそれを聞くことができる。
- ・参加者相互の会話が始まってでも対応できる。

<デメリット>

- ・人数が多いと行えない進行方法。

<その他>

- ・講師のパーソナリティに依るところが大きい。
- ・時間の管理、進行に巧みなスキルが必要。

ワークショップ型

足立（4（山田・山下））

<メリット>

- ・講師の進行の中で、参加者が自由に意見を出すことができる。
- ・テーマに沿った形で、多様な意見を確認することができる。
- ・講師が意見をまとめた形で紹介するので、理解しやすい。

<デメリット>

- ・話題の広がり参加者がつくることはできない。
- ・進行の流れがあるので、気になった項目をそれ以上、深めることができない。

ディスカッション型

三市（1（倉持））、足立（1（倉持））

講師がテーマやルールを与え、参加者がそのことやそのルールに従って話し合う形式。時間を区切らない方法や、時間を区切る方法がある。

<メリット>

- ・参加者同士が深く自分を表現し、相手を聞くことができる。
- ・他己紹介を通じて、他人を理解することができる。
- ・参加者がそれぞれ満足感を得る。

<デメリット>

- ・それぞれのテーブルで行われた会話を聞くことはできない。
- ・ファシリテーターを配置する負荷がかかる

以上、それぞれの形式にはメリットデメリットがあり、また、その形式ごとに可能なコミュニケーションの結果が変わってくるのが分かった。目的を明確にすることで、取りうる形式が明確になってくるので、交流のあり方や、講座の内容にあわせて選択する必要がある。

4 成果のまとめと課題

4-1 活動展開事例としての成果

カフェ講座を通じて、参加者の交流をはかった結果、様々な出会いや、情報交流が生まれた。その中から、いくつかの具体的な活動の展開や活動が生まれ、地域の教育力の強化につながる取り組みが実現し、開始されている。

展開事例 1：

活動場所を探していた参加者が、放課後子ども教室のコーディネーターとカフェ講座で出会い、放課後子ども教室を見学。年間のスケジュールに組み込まれた工作教室を実施することになった。まず、月に1回程度の工作教室を行いながら、徐々に活動回数を増やしていく予定である。

展開事例 2：

小金井市内小学校の放課後子ども教室の実行委員長がカフェ講座に参加し、学習サポーターを募集し、人材を求めていたところ、他の子ども教室でそろばんや算数を教えている参加者とニーズが合い、同じく、学習サポートを行っている他の参加者とともに支援活動の場を広げることにつながった。今後、継続的な関わりを検討することが決まっている。

展開事例 3：

中学生のための居場所づくりを行いたいと考えていた参加者同士。カフェで交流する中で、賛同者を得、活動場所や運営方法などのノウハウを得ることができ、居場所として借りられるスペースの情報も参加者から紹介してもらい、社会教育施設の使用ができることになり、開設準備を進めている。

展開事例 4：

教育関係で何か活動を立ち上げたいと思っていた参加者が、講座とカフェの参加により、これまで温めていた教師の育成サポートに関して重要性を再認識し、仲間とともに現場「教師のサポート会」の組織を立ち上げ、運営を開始した。

展開事例 5：

カフェに参加したコーディネーターが、様々な参加者に対して、実際に欲しい人材情報をPRすることを通じて、どのような人材が望まれているか具体的に伝達できたことで、カフェ講座参加者の周囲にいる活動者の紹介につながった。

展開事例 6 :

これまで活動を具体的にはじめていなかった参加者が、カフェ講座での参加者同士の交流を通じて、公民館での活動の話題にふれ、これまで知らなかった様々なグループがあることを知り、連携して活動を行えるよう、公民館へ出かけ、いくつかのグループに対して、活動の打診を開始した。

展開事例 7 :

行政の方もカフェ講座に参加され、会議とは異なる形で、行政同士の交流もできた。また同じ庁舎内の隣の課の職員と同じテーブルについたことで、横の情報交流にもつながった。

活動事例 8 :

活動の「場」をもっている参加者と、活動「内容」をもっている参加者が交流することを通じて、いくつかの「場」をかけ持ちして活動する活動者と、様々な活動者が活動する「場」をもつ参加者が、相互に紹介し合うような形での人材のネットワークが生まれつつある。

活動事例 9 :

これまで様々な活動を手伝うような形で活動を行っていた参加者から、カフェの場を利用して、新しい取り組みの提案があり、カフェ内でプレゼンテーションを行った。他の参加者から、取り組みの実現や告知、人選などに関して多様なアドバイスを得て、具体的に活動を計画中である。

活動事例 10 :

地域で読み聞かせや読書活動を進めている参加者が、カフェ講座での交流の時間に、講師との交流の中で、活動の目的や問題点などを話し、講師の所属している大学の学生に活動参加を呼びかけることとなった。より若い活動の仲間を得られる機会となり、また、大学の学生にとっても子どもと接する機会となることにつながり、相互に効果の認められる取り組みが進行中である。

4-2 カフェ講座、2つの地域モデル

今回のカフェ講座を実施するにあたり、行政との連携の方法が異なった効果を生むことになった。足立区では、大きなネットワーク（行政が進行している地域と大学との連携、社会教育施設の利活用促進など）との繋がりにおいて、参加者の交流が実際の活動の場につながりやすいというメリットがあり、また、子ども・地域への取り組みということから、講師との距離感も、より近い親密な形で交流を行うことができたように見受けられた。それは、常に講師が交流の進行を行うということからの効果であるとも捉えられる。

三市では、活動側からのアプローチを取ることで、既存の活動を活性化させることを主眼にし、講座では地域の活動者をメインとして、参加者によるフリーな交流を重視したので、結果として「場」としての効果が高かったように捉えられる。

4-3 交流カフェの効果

交流のきっかけとしての「カフェ」に対する参加者の継続希望の声は多いが、毎回の参加者の数と、活動の種類が課題となった。より多い参加者を得られれば、より多くの成果が得られることは明らかで、そのために今回の研究で得られた、詳細な「交流のつくり方」のノウハウをもとに、継続性と規模性を獲得していく必要がある。

実際に、活動の場の運営を行うと、当初想定していた支援者とのマッチングには、深い相互理解と時間が必要であるということがわかってきた。実際、参加者の中には、一緒に活動をはじめ前の「人柄把握としてもカフェは利用できる」という声も聞かれた。そのことは、実際の活動現場で問題となる、ミスマッチングが生じる可能性について、受け入れ側、参加側ともに大きな課題であるということを示している。そういう点でも、カフェ講座初回（三市 vol. 1、足立 vol. 1）の倉持伸江先生による、「10分間自己紹介」のもたらした相互理解の時間は重要なアプローチであったと言える。交流を行う「カフェ」において、「相互理解」を図ることがもっとも重要な項目のひとつとして位置づけられる。

また、「連携」を促すことについては、内容的には一致していても、地域が離れていることが問題となったり、目的が一致していてもアプローチが異なるため、「すぐに連携」というわけにはいかないという事例も見受けられた。また、わざわざ連携しなくても、「好きな人が好きなように行えばいい」という考えも聞かれた。成果につながった事例もあることから、いずれにしても、短期的な成果はごく少数で、効果を望むには継続的な関わりの中で事例を生んでいくことが重要であるといえる。

また、今回の交流の成果では、活動の場を求めている参加者が、活動の場を得たというような「マッチング」的な成果を得られたが、「異業種の連携」については、イベントの企画や、具体的な「場」の運営など、交流のテーマの投げかけ方を工夫する課題が残った。

交流の運営では、フリートークの際、各テーブルにファシリテーターがついた方がより、公平に会話への参加感を提供できたが、スタッフを多く揃えなければならないので、継続に負担がかかる問題がある。また、前半のゲストの話が長めになり、後半のフリートークの時間が足りなくなることがあり、時間配分を再考することも課題となった。さらには、参加の呼びかけ方法と関連して、参加者から出てきた課題、話のタネをフォローしていく体制づくりも必要である。

4-4 参加の課題

今回のカフェ講座に関して、参加者拡大へのアプローチが弱かったという点が課題としてあげられる。既存の情報発信手段の「メールマガジン」「メーリングリスト」など、比較的個人に伝わりやすい連絡手段を用いたが、集客に結びつかなかった。これは、開催の時間設

定や、呼びかけ方（メールの配信のタイミング）など、多くの要因が関わっており、問題の把握が難しいためである。いずれにしても、より効果的な集客方法を検討する課題が残った。

一方、一連のカフェ講座を実施した結果、参加者同士が仲良くなるといった、相互理解を踏まえた交流の効果が認められたので、次回の交流時には、活動を共にしている仲間を一人連れて来るといった仕組みなど、親密な交流だからできる方法も検討に値するのではないだろうか。また、参加感と地域の意見を得るため、地域の社会教育施設に情報掲示板を設置するなどの工夫も集客に対して有効な手段と考えられる。

4-5 ターミナルという仕組み

今回のカフェ講座の成果として、様々な学びを得られる多様な講座を開催することができた。それは多くの参加者の学びにつながった。また、交流を行うカフェの実施では、多くの方々から交流をはかり、相互理解し、様々な活動展開の成果を得られた。「このような場を待っていた。」「ぜひカフェ講座を継続してほしい。」との声も聞かれ、実施した内容としては質の高いものとなったと捉えられる。

一方、当研究所のような、地域の教育支援者への認証支援や、講座を行っている団体にとっても、このような場は大変貴重な機会であるということが確認された。これまで行なってきた他の取り組みでは得られない、現場の様々な声や、ニーズ、計画からは見えない問題点などにリアルに接することができる、教育支援者との接点づくりとなった。

また、その場の設え方や、進行の方法、テーマの投げかけ方、講師の人選など様々なファクターを選び、計画しながら地域の支援者とのコミュニケーションを図ることが、真に地域の教育力強化につながっていくということに対して少なからず効果を示すことができたと捉えられる。

これは、カフェ講座実施に協力していただいた行政の方々も同様で、今回のような地域の教育支援者を支える取り組みにおいて、地域の教育委員会はとても理想的なパートナーとなることが確認された。

今回の事例数では、まだまだ地域の教育力の強化に対する、様々なニーズや活動には足りないことは明らかである。地域の教育リソースが集まるカフェの機能検証は、今後、さらに事例を増やし、継続していく必要がある。

5 評価

5-1 講座講師の声

<帝京科学大学 井筒 紫乃 先生>

1 対多の講義形式ではなく、カフェ形式という参加者主体型の活動はとても有意義だと思います。そして、今回の講座においては、笑顔あふれる参加者のみなさんに逆に元気をもらうことができました。

家庭から一步離れた「居場所」は、大人の方たちにも大切ではないかと思います。そしてそこが「心地良い居場所」であれば、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）も高まっていくと思います。活動を連携していくためには、参加者の方たちの「居場所」が必要です。そして、このカフェ講座がその「居場所」であることを希望します。

人は「生涯勉強・生涯成長」だと思います。是非、このカフェ講座で、たくさん勉強を積み、もっともっと成長を続けてほしいと思います。

<東京未来大学 鈴木 光男 先生>

カフェという名に相応しく、自由に交流しながら互いの意見や考え・企画などを共有できるのは素敵です。ただし、今のところ特別な場所と時間を設定しなければならず、その回数・頻度において圧倒的に少なく、そのために参加者も非常に限られているものですね。これが、日常的にカフェとしてオープンしていて、場と時間が提供されていたら…と思いました。

連携するためにも、それぞれの興味・関心を響き合わせ、共鳴・共振していくことが肝要かと思いました。今回は、私が話題提供をして進めましたが、参加者の主体的な話題の提供、企画の提案がなされるといいなと感じられました。

東日本大震災の後、私たち日本人は改めて「絆」の大切さを実感しました。地中に張り巡らされた木の根っこが、綱のように絡み合うこと…それが「キヅナ」なのだとか。皆さんの活動それぞれが地に足の着いたものとして広がるのが、地域のキヅナを強固にしていくものとして期待されます。楽しみながら、いろいろな人と共鳴・共振し合って活動が拡充・発展していくことを期待しています。

<神奈川大学講師 久田 邦明 先生>

コーヒーと BGM、そしてざっくばらんな雰囲気印象に残りました。ただ、それだけに、会場が学校の教室のようなところだったのは残念です。これはこの事業への文句ではありません。住民施設に共通の問題です。今後の住民施設の在り方を考えるヒントになりました。

幸いなことに具体的な計画を持つ人たちと話をすることができました。ひとまかせでは連携は難しいと思いますが、そういう人がいれば、連携がすすむと思います。

<小金井子育て・子育てネットワーク協議会 佐藤 宮子さん>

カフェという交流の場は、とてもよいと思います。

ただ毎回メンバーが異なり、いつでも自己紹介からスタートで、肝心な話になる前に終了時間が来てしまうのが残念でした。

もちろん、参加者の皆さんが「連携」していくのは、大切なことだと思います。ただ漠然と連携というのではなく、今後は焦点を絞っていけるとよいと思います。

<まなびアンテナ編集長 布 昭子さん>

活動を進めていくにあたって、情報の共有はとても大切と感じます。その意味において、顔を見ながら直接情報を共有できる場があることは有意義と考えています。

単独の活動より、力を合わせることで多様な関わりが生まれ、継続していくための力になると思います。そのような機会があることは、助かります。

このような機会を通しての出会いは、またどこかでつながっていくものです。今回うまく連携できなくても、大切にしていけば何かしらの形、機会で自分自身のまなびになり宝物になっていきます。ぜひこのような場を活かしていきましょう。

5-2 運営協力者の声

運営協力者の方々より、「カフェという交流の場について・連携を促すことについて・運営について」の3点を中心に、本プロジェクトについてのコメントをいただいた。

<足立区教育委員会子ども家庭部青少年課担当 村上 長彦 氏 福井 京子 氏>

地域で活動する皆様の、「語り合いたい」という気持ちが、伝わってくる事業でした。

一方的ではない、双方向、他方向の交流が、皆様のパワーに変わるのかもしれない。

さまざまな立場の方が、肩書きや立場を超えて、本音で交流でき、そのことが、人と人とのつながりを生み出すように感じました。

連携が重荷にならないように、みなさんの活動の後押しになるように、そのような方法を見出したいと、常々考えています。カフェは、その可能性を秘めた場ではないでしょうか。双方向、他方向の交流から出てきた連携なので、お互いの活動に生きる形を見つけやすいと思います。授業形式の講座より、少ない準備で実行可能だと思います。

行政が会場を確保し、当日の運営を、参加者の皆さんに交代で担当していただくと、継続が可能になるのではないかと考えています。みなさまのご協力をいただけることを、願っています。

<小平市教育委員会 季高 一成 氏>

現在さまざまな場面で、ボランティアやコーディネーターを育成するために、官民、地域の連携の試みがなされています。また、人材を育成する講座や研修会も多々行われるようになってきました。

その中で、「活動したい」という供給と「受け入れたい」という需要が一致しないことが多く、大きな課題とされていました。

この「カフェ」はその課題を切り崩していく、突破口になると大変期待しています。今後、継続して実施されることが鍵になると考えています。

組織の中で、一番難しいことは「横のつながり」を構築することではないかと考えています。「連携」とはこの「縦のつながり」に「横のつながり」を加え、かつ「斜めの関わり」も構築できる可能性を秘めていると考えています。

さまざまな立場の方が「連携」することにより、その「取り組み」は広がりと深みを増すことができるのではないのでしょうか。

6 外部評価

6-1 梶野 光信 氏（東京都教育庁社会教育主事）

「認証人材活用のための『IOT 拠点（課題指向型ターミナル機能）』創出プロジェクトへのコメント

1. I O T拠点（Issue-Oriented Terminal）を創出する意義

大都市部における社会教育行政の現状

大都市部における社会教育行政はおしなべて低調傾向にある。その原因を探ることは、容易なことではない。行政改革が求められる昨今の状況の下で、社会教育施設を中心に展開される従来型の社会教育行政のスタイルでは、多様化・複雑化・細分化する住民ニーズに対応することはできない。

また、本格的な人口減少社会に入り、税収増は見込めない中で、社会教育施設の数を増やすという発想は現実的ではない。従来の社会教育行政が依拠していたのは、町会・自治会を中心としたいわゆるエリア型コミュニティであり、NPOをはじめとしたテーマ型コミュニティとの接点をうまく構築できずに呻吟している。

学びと交流のプラットフォームをつくる

こういった社会教育行政の現状を打開するための方策として、第5期東京都生涯学習審議会（平成17年1月）は「地域教育プラットフォーム」構想を提案した。今後、大都市部において、社会教育行政が目指すべき方向は、地域住民同士の出会いが多様に起こりうる「場」（地域プラットフォーム）づくりを進め、住民自身が地域の生活課題を協働して解決していける力を身につけるための環境設定を行うことである。

今回のプロジェクトでは地域の中に「学びと交流のプラットフォーム」（フューチャー講座&カフェ）を展開し、各地域の活動をI O T拠点が支えるという事業スキームを生み出した。これは、大学の知を地域に還元するという観点からも重要な意義がある。都内には数多くの高等教育機関があり、これらの機関が地域・社会貢献活動に積極的に乗り出すことが期待される。

2. フューチャー講座&カフェを持続可能なものにしていくために

平成24年度は、4地区（足立区、小金井市/小平市/国分寺市）でフューチャー講座&カフェが試行された。社会教育施設が提供する一般的な「学習・講座」とは異なった「参加型学習」のスタイルは、社会教育行政の分野では十分に浸透していない。そうい

った意味では今年度の取組参加型学習を地域住民が「体験」をしたという程度に留まっているといえる。

しかし、私としては、各地域で取り組まれた「連携プロジェクトをつくろう！」において、その地域の住民がゲスト（話題提供者）として関わるという仕掛けをつくったことは評価できる。このような学びの場は、地域の人自身の手により、相互承認を積み重ねながら発展していくものだと考えるからであり、今回の取り組みは絶好のきっかけづくりとなったのではないか。

「行政サービス」という言葉はこれまで当たり前のように遣われてきた。しかしこれからは、住民ニーズに的確に応えうるサービスを、行政のみが提供するという発想を転換していかなければ、人口減少社会の下で持続可能な社会づくりはできない。近年「ソーシャル・キャピタル」というものに関心が集まっている。地域における人々をつなぎ、住民自身の手で身近な生活課題を解決するというスタイルを都内各地に創出し、定着させるための地域の担い手づくりを支えていくことが大学・行政といった公的機関に課せられた使命であることを確認しておきたい。

6-2 上平 泰博 氏 （NPO 法人ワーカーズコープ 三多摩エリア子育てPJアドバイザー）

本事業における外部評価者として、最初この事業領域についての若干の振り返りをしておきたい。1970年代から子どもの学校外教育、子どもの社会教育、学社連携といった用語概念が登場していた。それでもまだ学校教育を中心とした教育は機能していた。それは地域の教育力が機能し、子どもは地域の子どものとして育むことで家庭の教育力養育力もあったからである。しかし80年代以降、地域の青少年諸団体は急激に減じていくなかで、校内暴力など様々な問題が浮上していた。こうしたことは、学校外の子どもの生活基盤の充実強化は、学校教育を十全とするための学校教育の延長とか補完のための繕い事業ではなく、子どもが生きていく上で最低限あってしかるべき豊かな生活環境条件の整備といえた。ある意味、昔ながらの地域での世代間交流といった機能や役割が地域や家庭の中で喪失してしまえば、子どもの成長と発達は望めず、学校教育すら機能不全に陥るという現実そのものであった。

本事業計画と実効性はまだ発展途上段階にあるが、上記に指摘した課題の新しい形での復権を明らかに認められる。認証を前提にした人材育成とともに、認証後に活躍する場を設定するだろうという新たな課題に挑戦している。このような延伸事業は、いわゆる職業キャリア教育の訓練生のその後の「出口」論とも類似し、いままも福祉・労働分野において困難を極めている最重要課題である。技能訓練期間の保障と匠認証とが準備周到に用意されても、その後に活躍する場がなければ紙切れ認証に等しく、実際のところ就労定着率は低いために、雇用企業側からの継続的フォローアップの要望が根強くある。訓練認証型事業者とその後展開する就労支援型事業者とが当人を交えながら連絡調整機関として、中間的就労支援等を活用しながら分業もしくは協業する方向にある。

教育分野においてもまた学校教育と社会教育と地域との関係において、地域で子育てサポートする人材を育成し、独自に人員配置を構想し活躍する場をも保障してこそゴー

ルであることは趨勢とならざるを得ないだろう。まだこの取り組みは初期段階にあって、調査データの集積分析とノウハウの確立が今後の課題といえる。学校支援と放課後支援の方法論は歴史理論的な整理と構築まで問われており、認証サポーター、コーディネーターの恒常的なスキルアップを含め容易ならざる難題といえよう。社会教育主事、スクールソーシャルワークといった、子どもの学校外生活における教育と福祉の専門家によるアプローチ可能な法制スキームの担保は限られている。文科省が奨励し補助してきたジュニアリーダー、子ども会活動といった既存の事業は地域力が萎えていくなかで、ごく限られた層の子どもにしか活用されないものとなりつつある。そうしたなかで、これまで子ども未来研究所が提起してきた数々のとりくみは、子どもたちの置かれている地域の現状に斬新かつマッチングする形で切り込み待望されている事業といえよう。

最後に、これまでの成果を踏まえつつ若干の問題提起と課題を記しておきたい。地域の子どもたちにアウトリーチする教育サポーターには、子どもを真ん中におきつつも背後にある生活福祉課題、高齢者、障害者、若者問題といった周辺領域との総合化複合化に留意する(素人なりの)ワンストップの人材が求められている。そのためにも「協議会の設置と運営」「カフェ機能」は有効であるが、その人材養成の対象は多方面にわたることが望ましい。またサポーターの実践力をつけていく上では、多角的な講座を組織しながらも、別途サポーターが日常的に来られる「子育ての現場」が用意され、そこから学ぶことがより効果的で实际的である。それは認証事後のことではなく事前であればなお良い。事後も認証者のスーパーバイザーとともに支援者同士による継続的な学習交流活動が保障されなければ、引き続き参加することスキルアップしていくことは不可能である。

くわえて、認証された者が地域ボランティアでありつづける選択肢とボランティアから発展して地元の事業者となって主体的にかかわるといった選択肢もあっていいのではないか。「新しい公共」という形で住民主体、市民主体による子育て支援事業の展開がこの10年間に急速に進捗したことを考慮すれば、地域に「プラットフォーム」と「ターミナル」拠点とが有機的につながることが早期に求められているのではないだろうか。

6-3 山下 光太郎 氏 (小金井青年会議所)

フューチャー講座&カフェについて

どんな問題でも隣接する近隣市が集まることは同じような環境下(立地条件、商圈、人口、自然環境等々)にも関わらず、行政の方針や予算によって対応が違っていると認識できるいい機会であると感じました。同時に良い点や悪い点を各行政サイドが振り返りえる事も可能な機会となったことでしょう。参加している子育て関連団体についてもビジネスに繋がりにくいという子育て関連事業特有のハンデがあるため、何かしらのヒントを見つけないと意欲あふれる参加者が必然的に多く見受けられました。

そして、カフェ形式を取り入れることによってリラックスした雰囲気の中で意見交換が出来た事は、講義形式よりも自由度が高く内容が濃い意見交換の場の提供として一定

の成果は見受けられました。しかし、カフェ形式では最後の結論や次回以降の段取りや今後についての方向性をしっかりと確認が出来ないデメリットも同時に持ち合わせていました。同じテーマで活動している団体を集めても講義形式、カフェ形式どちらも一長一短の側面があるためうまく使い分ける必要があるでしょう。子育て関連活動と言っても子供のためなのか、親のためなのか、はたまた障害を持たれている子供なのかにはじまり、何を目的にするかによって団体の活動内容も変わり多岐にわたります。各団体の皆様が必要な知識を得て、より活動が活発になり発展していくためのマッチングは一度や二度の同じような手法では何も進展が生まれません。また、いつも全ての団体が参加できるとは限らないため、運営側が参加団体の継続的な管理はもちろん、専門のコーディネーター役も置く事が出来るかが今後の課題でしょう。何より活動している団体それぞれで、個別に活動をPRすると非常に非効率のため一括で情報収集し発信する場の必要性も横の繋がりを作る事と並行して行うべきではないでしょうか。

小金井青年会議所が主催するキッズカーニバル KOGANEI も6年連続の開催とはいえ、事業の発端は小金井市内の子育て団体が市民の皆様に浸透していないことに着目して、青年会議所がその旗振り役になればと始めました。しかし、常に子育て関連の事業を行っているわけではないため、一堂に介す場所の提供が主な仕事になっており、専門で行う人にはお任せすべきところはしないと感じているところです。まさしく今回のフューチャー講座&カフェについては子供のために活動している東京学芸大こども未来研究所が旗振り役となっているため、私達小金井青年会議所の課題は解決できているように見えます。しかし、専門的な立場としては問題が多岐にわたるため、何をすれば効果的かしっかりと検討する事が今後の課題ではないでしょうか。

添付資料

アンケート

- ① 事前調査アンケート
- ② 事前調査アンケート（調査票）
- ③ 事後アンケート（※計画時には実施する予定であったが、事前に行ったアンケート回答者が事後の回答者とはならなかったため、比較することができないこと、本事業に参加した結果、展開の事例として複数の効果が得られたことから、実施しなかった。）

印刷物

- ① 全体パンフ（三市・足立）
- ② 終盤パンフ（三市・足立）
- ③ ニュースペーパー（三市・足立）